

す  
ず  
め



冷たい風が皮膚を刺す中、私は戦場へと自転車を駆る。  
戦場。職場を指す人もいる、学校を指す人もいる、悲しいかな家庭を指す人もいる。  
私の場合の戦場は、スーパーや市場を指す。  
今日、ポストに入っていた1枚のチラシが、私を戦場に駆り出す。「大根1本68円（200本限り）」  
この何気ない文字を見た瞬間、私の脳内に開戦のホラ貝が鳴り響いた。

不景気が生存競争を煽っている。足りない生活費は体力で補う！私達庶民に課せられた、至極真っ当な生存手段である。世の中には、この健康すら叶わない庶民さえいるのだ。ありあまった体力の何を恥じよう。

合戦場が定まった以上、ぼやぼやとしてはいられない。食卓の分量を守るため愛馬（ママチャリ）を彗星と化す。この一漕ぎに、夫の胃袋が！このハンドルさばきに、子供の成長が！  
踏みしめるペダルに、家族のエンゲル係数と主婦としての誇りをかける。ペダルを踏み込むたびに、大根は夕食へと近づいてゆく。この竹藪がアーチをなす坂を越えればとなり駅。チラシのスーパーはもうすぐだ。

オデン、フロフキ、デンガク、ブリアラダイコン！華麗な食卓の妄想は止まらない。しかし、その前に、私の前に立ちはだかる大勢の猛者どもを蹴散らさねばならない。食卓での名声を賭けての勝負。私同様、彼らも剛の者なのだ。

気を引き締め、いざ、戦場へのラストスパート！渾身の力でペダルを踏み込んだ瞬間、目の前を黒い塊が素早くよぎる。

雀！？

目の前に飛び出した塊が、なにかよくわからないが、おそらく生き物だ。生き物とおぼしきものを黙って轢いてしまうわけにはいかない。急いで手綱に、いや、ブレーキに手をかける。

雀なら尚更、飛び出して来たとはいえ生物を轢き殺してしまうのは寝覚めが悪い。しかし、愛馬は嘶き、いや、ブレーキは壮絶な悲鳴を上げるものの、すぐに止まらなかった。

まずい！手に渾身の力を込め、これ以上握る事のできないブレーキレバーを更に握り締める。  
止まれ—————！！

体中の筋肉を緊張させながら、自転車を止める事だけに集中した。

次の瞬間、すぐ脇の藪の中から更に十数羽の雀が羽音をたてながら、わらわらと目の前に飛び出して来た。

なに—————い！！

目を疑うような状況の悪化に瞬時に息を飲む。無意識の内に、手はブレーキレバーを潰さんばかりに握りしめていた。

もう、眼をつぶる以外に現状から逃れる手はないのか！と考えた瞬間、体が勝手に右ハンドルを手前にと引き込んだ。滑るように進んでいた前輪が傾き、道路を殴打するような鈍い音を立て

て歩道脇のタイヤ止めに乗り上げて止まった。

辺りにはしばらくの間、金属の悲鳴の余韻とゴムが焼ける臭いが漂っていた。

自転車が止まった事を確認した私は、急激な疲労と安堵がないまぜになったものを感じて、大きな息を吐きながら自転車のハンドルに突っ伏した。

あ、雀。

私は慌てて後ろを振り返ると、滑ったようなタイヤ痕が残る歩道の脇に、小さな茶色い塊がモソモソと蠢いていた。

「いてーよーお、いてーよーお」

「大丈夫か！？アカン、羽根外れてるわ。」

4羽の雀は、私の顔をチラチラと見ながら1羽の雀の介抱していた。

雀ってしゃべったっけ？

驚いて二の句が継げない私に向かって、雀達はまくしたてる。

「アブネージャネーか！どこ見て走ってんだよ！」

「こいつ、羽根外れちまったぜ！」

「イテーヨーイテーヨー」

「かわいそうに、すぐに猫の餌食になっちゃうよ。」

え、なにがどうなってるの？自分の置かれた立場を理解出来ず、私はオロオロと雀達の怒鳴り声を聞いていた。

こういう場合って、大丈夫ですかとか、すみませんとか、救急車を呼びますとか言わなきゃいけないんだろうか？でも、雀。。。だよ。こいつら。。。

でも、私が轢いちゃったのかな？実感ないけど、ごめんくらいは言わないとマズいかな。

「あっと、その、ダイジョウブですか？。。。」

私が声をかけた瞬間、1羽の雀がギロリとにらむ。

「大丈夫じゃねーよ！羽外れちまってるよ！」

「えーと、脱臼。。。ですか？」

「イテーヨーイテーヨー」

雀がにらみつける中、もう1羽の雀が半泣きで私に訴える。

「僕らにとって、羽が外れるっていうのは『死』も同然なんですよ！エサが集められないし、天敵から逃げる事もできないんですよ！」

そうは言っても、飛び出して来たのはあんたらじゃあ。。。

「いや、でも、飛び出して来たのあなた方でしょ？」

その言葉が合図だったのかと思うように、一斉に雀達は振り向いた。

「なんだとおー！！怪我さしておいて、その言い草は何なんだよ！」

「人間だと思って黙って聞いてりゃ、エラそうに！ここの竹藪を勝手に道路にしちまったから危なくても使ってるんじゃねーか！」

「イテューイテュー」

「猿より3本毛が多いだけで地球のリーダー気取り!？」

いや、最後の台詞はなに? 事故に関わりないじゃん。

私は啞然としたまま、雀の集中砲火を受けていた。すると、どこからともなく白い羽の混じった雀が出て来た。

「まあまあ、待ちなさいよみんな。この人だって、わざとわし等にぶつかったわけじゃないんだから。ね? そうでしょ? 奥さん。」

その雀は、他の雀達をなだめる。

「わざとじゃなきゃいいのかよー?」

「そうだよ、鳥獣保護法は何の為にあるんだよ。俺等のためじゃなのか。」

「人間の肩持つ気!？」

「イテューイテュー」

4羽の雀が白羽の雀に詰め寄って行く。台湾かどっかの見せ物で、こんなのがなかったっけ?

当事者の私を置き去りに話はどんどん進行していく。

「まあまあ、落ち着きなさいって。ここでごねても外れた羽根が元に戻るわけじゃない。この奥さんだっでご近所の手前、か弱い雀をひねり潰したなんて言われたら困るだろう。」

雀が世間体考えてる! そりゃ、言いふらされないに越した事ないけどって、まだ死んでないしひねってもない!

しかも、その雀、えらく元気そうに力強くのたうってるんですけど。こいつら雀なのに、なにこのサル芝居?

「お、おれは、もういい。。。イテューイテュー。。。」

轢かれた雀が急に、よく通る声で話し始めた。やっぱり元気そうだ。。。

「しっかりしろ!!」

「そんな気弱な事でどうするの!」

「お前が死んだら、足の悪いカミさんやガキ共や病弱なお袋さんや入院中の親父さんどうするんだよお!!」

なんか、話がキナ臭くなってないか? なに? その健気な不幸のオンパレード。

「はは、ガキ共はまだ小さいし、カミさんやオヤジやお袋は俺だけが頼りの身の上だ。。。俺が死んだら。。。飢え死にしかないだろうなあ。。。。。。。。イテューイテュー」

雀達は、私をそっちのけに話を進め勝手に盛り上がっている。

勝手に飛び出して来たのあんた等じゃないの?! と言いたいのだが、一家そろって飢え死にアピールの後に何が言えよう。

すると、白羽の雀が私の肩にとまった。

「奥さん、あなたがわざとこの雀を轢いたんじゃないのは充分わかっています。」

いや、事故そのものが胡散臭くなって来てるんですけど。

「悲しい悲しい事故です。」

事故で押し切るつもりか！

「あの雀は、もうすぐ死んでしまうかもしれません。」

「なんか、力強いのたうってるんで死にそうにないですけど。。。」

「グホッ！モアーカーンーーー！！」

不審に思っている事を口にした途端、雀がいきなり死にそうになった。しかも、えらく力強い断末魔なんですけど！

「もおーアカーン。死んだジーサンが迎えに来てるーう。イテーヨーイテーヨー」

「しっかりしろ！家族も死んじゃうぞ！」

「みんなあ〜、先にサイホーjordで待ってるでえ〜〜〜〜。イテーヨーイテーヨー」

「死んじゃダメー！！」

「俺が死んだ後、もしも、カミさんやガキ共やオヤジやお袋が飢え死にした時は。。。俺と一緒に埋めてくれ。。。イテーヨーイテーヨー」

「わかった！安心しろ！もしもの時は、あの女の家の庭に家族そろって埋めてやるからな！安心しろ！」

いや、安心出来ねーって！だーかーらー！さっきまでそいつ元気そうだったじゃん。

「あのね！」

私が口を開いた瞬間に、白羽の雀が羽で私を制した。

「奥さん、わし等小動物はか弱い存在だから容態も急変しやすいのよ。」

いや！急変にも程があるだろう！！

「それにね、鳥獣保護法って罰則があつてね。雀や烏や鳩も保護対象なの。いくら、ワシらが俊敏でも、あんなにスピードの出てる自転車をよけられるはずがない。過失、では通らないと思いますよ。」

白羽の雀は黙って、道路のタイヤ痕を羽で指した。

もしかして、私脅されてる？雀に？

「鳥獣保護法は、実刑若しくは罰金なんだけど、ね。わざとじゃないんだし、その若さで前科はお気の毒だ。一生懸命働いてるご主人にも、たかが雀の件でご迷惑をかけるのも僥倖ない。お子さん、小学校で飼育係をされてるんですかね？優しいお子さんだつて鶏が褒めてましたよ。こんな事は、ね？奥さん。」

白羽の雀は、私の肩にそっと羽根を置いた。

「示談にした方がいい。」

私が5kgの米を巻き上げられた数週間後、奴らが当たり屋行為の恐喝などで逮捕されたとのニュースが流れた。

極めて珍しい犯罪であるのと同時に、環境や不景気の問題が相まって連日のように報道され、ワイドショーでは、なぜか環境省が槍玉にあげられている。文句言えれば誰でもいい状態だ。

あの白羽の雀は、不況と環境悪化のため思うように餌が集まらず、やむにやまれず犯行に及ん

だと涙を見せていた。同情も集まる一方、自転車の主婦を狙って犯行を繰り返し、時には架空のスーパーのチラシまで使って獲物をおびき寄せる手口は悪質だと論議を呼んでいる。どういった経緯か知らないが、動物愛護団体や自然保護団体が擁護に乗り出したので、しばらくは盛り上がり行って行くことだろう。

米を巻き上げられたのは腹だたしい、しかし、奴らも私も、この世という戦場で生きている。皆持てる力と許された能力を駆使して、踏み越えてはならない境界線を死守している。道さえ誤らなければ、奴らも剛の者と賞賛される事もあったろう。報道内容を知る内に、妙に世俗にまみれてしまった雀に一抹の哀れさを感じていた。